

## 「三年とうげ」の授業から学んだこと Ⅱ 音読を軸に展開することⅡ

授業を進める中で見えてきたことの一つは、子どもたちがとても楽しげに音読するということだった。

その理由の一つは、文章自体がとてもリズムのある文体になっているということがある。「三年とうげのいいつたえ」の歌ばかりでなく、文章のあちこちに韻を踏んだような叙述をちりばめている。例えば、「春には、すみれ、たんぽぽ、ふでりんどう」「れんげつつのさくころは」「ころりん、ころり、すってんころり、ぺったんころり、ひよいころ、ころりん」など、自然と調子に乗っていけるリズムがある。

そして、もう一つは、この話の中のおじいさんの姿や行動のこっけいさが、子どもたちにもありありと見え、そのこっけいなさまを音読の中で楽しんでいるということがある。

前者については、教材解釈の段階である程度見えていたのだが、後者の方については、私自身授業の始めのころはその重要性をあまり意識していなかった。

第2時の授業をしたときのビデオをサークルの仲間に、検討してもらったとき、「ずいぶんまじめにやってるね。子どもたちは楽しく読んでいるのに、先生だけひとりまじめにやってる感じがする。」と、指摘された。

このときの私は、叙述に即しておじいさんの心の中を読み取らせることに意を尽くして展開しようとしていたのだが、子どもたちは「おいおい」とおばあさんにしがみついて子どもみたいに泣くおじいさんの姿そのものを音読で表現することを楽しんでいた。私がこの教材を読ませようとする方向と、子どもが読みたがっている方向にずれがあることを指摘されて、ここで初めて気がついたのだった。「子どもの事実から学ぶ」と言いつつ、やはり子どもの事実が見えていかなかったのだ。

### ② 音読から読み深めること

先に述べたように、この教材では音読を重要な学習活動として授業のなかに取り入れていくべきだ、とは教材解釈の段階から考えていた。しかし、音読と読みをどうつなげていくかについては、具体的にはつかめていなかった。実際の授業の中でいろいろ試みただから、私が学んだことを以下、記録に沿ってまとめてみる。

#### 「そんなある日」の場面の授業から

ここの場面を次のように展開した。

功 読む

T はい、ありがとう。今功君がよんでくれたところ、おじいさんの姿を思い浮かべてください。どんな顔して、どんな声で言ってるんだらうか。

C びっくりして、

T もう一度自分自分でよんで考えて。

C 読む

T じゃ、ひとりずつやってみましょう。まず、「おじいさんはふとんから顔を出しました。」まで。絵美子ちゃん。

絵美子 読む

T 今のきいててどう。ここで、「おじいさんは、ふとんから顔を出しました。」て書いたるね。どんなに出したの。のそつと出したの。

C ううん。びっくりして

T 雅美ちゃん、どっちのおじいさんがうかぶ。びっくりしたおじいさんが浮かぶのそつと顔を上げたおじいさんがうかぶ。

雅美 びっくりしたおじいさん。

T びっくりして、ぱつとおきたおじいさんがうかぶ。

雅美 ちゃんみたいに思う人。C (大半挙手)

ほう、どうしてそう思う。

基臣 あのな、びっくりして、もつと長生きできるとおもった。

恵 今まではずつと布団の中ばかりで、病気がようか重くなるばかりで、今にでも死にそうな感じだったけど、トルトリが病気が治ると言ったからびっくりした。

T もう今までだめやと思ってたのに、「治るよ。」て言ってくれたから、びっくりした。

満 恵ちゃんと同じで、治ると聞いてびっくりした。

亮輔 ぞーつとした。(問題を聞き違えていた。)

T ほうすると、みんなは、こういわったんやね。もうだめだと思っているのに「治るよ」ていったからびっくりした。

みんな、おじいさんがころんでから、村の人たちは、心配しましたね。この中で、だれか、「きつとなおるよ。」て言った人はだれかいたでしょうかね。

C いいひん。トルトリだけ。

T なんて、ひとりもないの。

C 全員信じてる。

T だれもいわないことを言ったから、おじいさんはびっくりして顔をあげた。

じゃ、先生トルトリになります。みんな、おじいさんになってください。

「どうすれば、なおるんじゃ。」をやってもらいます。

いいかい。「おいらの言う通りにすれば、おじいさんの病気はきつと治るよ。」

C どうすればなおるんじゃ。(みんなくちく一斉に言う。いろんな読みが混在している。)

T そんなふうにいわたんですか。もういちど

C 読む(声は大きくなるが、形式的な感じになる。)

T 誰か一人でやってもらおう。

大輔 (ふとんからもちあげる動作をつけながら言う)

C (笑い)

雄介(あわててどもるような言い方をする。)

C(みんなで言う)

私としては、まず、おじいさんの具体的な姿を思い浮かべることによって、それまでの叙述とのつながりが読めるだろうし、「どうすればなおるんじや。」の音読も明確なものになると考えていた。しかし、サークルでの検討会では、次のように指摘された。

・先に読みを作って、そのイメージで音読するという形は、一人一人の自由な読みを規制し、窮屈な学習にしてしまうことになる。また、読み取ったものを音読表現させてみるというだけで、そこから新しいものは生まれてこない。まず、一人一人が自由に音読してみる。みんなが音読を楽しむ中で、一人一人の読みの奥にあるおじいさんのイメージのちがいをたしかめ、ここでのおじいさんはどうだったのか、と迫っていくほうが子どもに即した自然な展開になったのではないか。

そうした反省を踏まえて、「自由な音読」から内容に迫ることを意識してやったのが次の授業記録である。

「おじいさんは、すっかりうれしくなりました。」の場面の授業から

T そのおもしろい歌をもう一度自分自分で読んでみてください。

C 読む。

T 功君、おもしろい歌って、何がおもしろいの。どこが面白いと思った。

義嗣 エイヤラエイヤラ

T 言葉が面白い。調子が面白い。

C 楽しい。

T どこが楽しい。

C リズムにのる。

和生 ここ。「こけてころんで、ひざついて、しりもちついてでんぐりがえり」

T 和生君は、なんかリズムがおもしろい。

亮輔 言葉もおもしろい。

T 言葉も面白い。どこが、おもしろい。

亮輔 「こけてころんで・・・」と、「えいやらえいやら」

基臣 言葉が連続で言うのも合う。

T 連続で言っていると、調子がいいんやな。

C そういう感じが出るように、もういっぺん読んでご覧。

C 読む

T じゃ、だれかやってくれない。和生君。

和生 読む

T 今の和生君のおもしろいね。えいやら、えいやらえいやらやて、こんなリズムがありましたね。

絵美子 読む

賢一 読む

(しぜんに、手などでリズムをとる子も出てきた)

T 手拍子つけたろうか。

亮 読む (読みにくそうだったので、やめるといったのだが、子どもたちは、勝手に手拍子をいれる。)

T みんなでやってみましょうか。

C みんなで読む

大輔 読む

雄介 読む

T はい、ここで問題です。「この歌を聞いて、おじいさんは、すっかりうれしくなりました。」て書いたるね。なんで、おじいさん、この歌が聞こえてきたら、すっかりうれしくなったんでしょようね。

はい、考えて。

郁美 歌声が楽しくなってきた。

義嗣 最初トルトリが言って、ちょうせんして、そして歌がきこえてきたからうれしくなった。

C (だれが歌っていたのかということ、少しぎわつく。)

T それは、あとで考えよう。

絵麻 あのな、トルトリ一人だけやったらな、ちよつと心配やけど、二人いやったら、ちよつと安心する。

T 絵麻ちゃん、もういっぺん言って。

絵麻 トルトリ一人だけやったら、ほんまかどうか、ちよつと心配やけど、二人言ってやったら、ちよつと安心する。

T はい、今絵麻ちゃんの言ったことわかる人。

義嗣 意味わからん。

雄介 あの、トルトリだけが言ったら、うそかもしれないけど、もう一人が言ったら、ほんまとおもえる。

T いうてやること、わかる。ここで、「うんなるほどなるほど。」てトルトリの話を信じたね。ほんで、よし、とおもって行ったんやね。でも、ここで、さらに、また

、「いっぺんころべば・・・」

基臣 歌にだんだん調子があってきたでな。

亮輔 ころんでたらな、歌が聞こえてきたでな、それに合わせて、転んでたら、おもしろうなってきたん。

T 今、基臣がいうてるのは、この歌に合わせてたら、調子が出てきた、ていうの。

基臣 調子乗ってきてな、楽しいなって調子がでてきてな、峠からふもとまでころんでいってしもたん。

T どんどん調子に乗ってリズムが出てきて、うれしくなった。

それから、美奈ちゃんは。

美奈 この歌を歌っている人が大勢だから、本当なんだなと思っとうれしくなった。Tま

た、いいこといわったよ。

基臣 君やらは、この歌のリズムがとっても調子がよくって、調子が出てきたから、はずんできた、ていうてやるんやろ。

もう一つは、トルトリの他にもみんなが言うてやる。美奈ちゃん、もういっぺん言うて。

美奈 おじいさんは、これが大勢で言うてるように聞こえたから、それが本当だなあと思っつてうれしくなった。

T この声が、美奈ちゃんは、一人の声じゃなくって、なんか、大勢の声に聞こえた。大勢の声が、「いっぺんころべば、・・・」て応援してくれてると思うと、ますます本当だなあっと思えてきて、うれしくなる。

和生 トルトリ一人やったらなあ、たのしくないしな、みんなでいったら、リズムが合ってきて楽しくなる。

T ああ。

雄介 先生、もう一こある。

T おっ。なんやて。

雄介 わしは、こんなかんたんなおりがたが、わからなかったんやなあって思いながら、楽しいなってる。

T ほう、今雄介いいこといったね。

義嗣 うん、言った言った。

T よっちゃん、なんていわったの。

義嗣 こんな簡単なおり方があったからな、楽しいなった。

和生 右、左に坂、ころぶとこあるやん。あそこで、こっちに転んだら、寿命が短くなっつて、こっちはなごうなるみたい。

基臣 あ、寿命がなくなるほうと、ふえるほうとみたい、思ったさかい。

T おかしくなってきたのね。さっきまでは、もうあかんとおもってたのに、今度はその反対で、転んだら、長生きできるって。こんな簡単なことがあったんだなあ。同じことで、長生きできるなんて。

すごいね。三つも出ましたね。